



結ぶ絆から、広がるご縁へ

第70号  
2024(令和6)年1月15日

# 四州教区だより





令和5年11月14日～16日

本願寺塩屋別院報恩講法要

今年も無事勤修  
一大法要 別院報恩講

—このご縁を喜ぶ—

講師 山宮 真船 師  
(本願寺派布教使 東海教区額田組伝道寺)

14日速夜 『大師影供作法』 『御伝鈔(上巻)』  
15日日中 『正信念仏偈作法第二種』  
15日速夜 『宗祖讚仰作法 音楽法要』 『御伝鈔(下巻)』  
16日日中 『新制御本典作法第二種』 『御俗姓』

11月14日から16日の3日間  
本願寺塩屋別院報恩講法要を  
勤修いたしました。今回はコ  
ロナ明け初めての報恩講とな  
り、14日速夜法要から16日日  
中法要まで、計4座のお勤め  
と法話がありました。

ご講師は山宮真船師(本願  
寺派布教使 東海教区額田組  
伝道寺)をお招きし、15日速  
夜法要『宗祖讚仰作法 音楽  
法要』では、阿讚雅楽会と豫  
州楽所の楽人並びにオルガン  
の調べも加わり、荘厳なお勤  
めとなりました。また、16日  
日中法要では新たに制定され  
た『新制御本典作法第二種』  
をお勤めし、新鮮でありなが  
ら緊張感のある法要となりま  
した。15日、16日には香川南  
組仏教婦人会と別院門徒の皆  
様にお手伝いいただき、讃岐  
うどんの接待を行いました。  
年に一度の一大法要は多く  
の参拜者で盛り上がり、無事  
にお勤まりになりました。





右上から「讃岐うどんの接待」  
 「ご講師の法話」  
 「14日逮夜法要」  
 左上から「楽人の出勤」  
 「導師登礼盤」  
 「御伝鈔拝読」  
 「内陣出勤直前」



## 雅楽の調べと共に

私は阿讃雅楽会に所属しており、この度は塩屋別院報恩講法要に楽人として出勤しました。担当は鳳笙で、雅楽を始め10年くらいになります。練習すればするほど雅楽の奥深さを味わうことができ楽しみながら演奏しております。また、このように招いていただけることはありがたく、塩屋別院での出勤ということもあり、気が引き締まる思いで演奏に臨めました。



阪西組 徳賢寺  
 合田英憲 住職

## 修復後の内陣で

阪西組では組内寺院が順番に塩屋別院報恩講法要に出勤しており、私はこれで3度目の出勤となります。今回は法要2日目の『宗祖讃仰作音楽法要』をお勤めしました。前回出勤した際は別院内陣が修復中でしたが、今回は修復され綺麗になった内陣でお勤めができ、とてもありがたいと感じました。



阪西組 正善寺  
 重信 厚 住職



## 四州教区・本願寺塩屋別院親鸞聖人御誕生850年・ 立教開宗800年慶讃法要に向けて

### 四州教区・本願寺塩屋別院親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要

1. 日 時： 2024(令和6)年5月12日(日)13:00～16:00
2. 日 程： 13:00 慶讃法要  
14:00 特命布教  
14:30 協賛行事  
15:50 閉会式・解散
3. 参拝方法： 会場(本願寺塩屋別院)に参拝 ※Youtubeを使いオンライン配信を併用
4. 内 容： 法要「新制 御本典作法 第二種」を依用  
行事①観世流 河村晴道一門による「石橋(しゃっきょう)」の解説と公演  
②和光こども園園児による歌と太鼓の披露

### 四州教区・塩屋別院法要委員会 第5回常任委員会

11月21日「第5回常任委員会」が開かれました。協議では、各組に依頼した出勤者状況についての報告と、依用作法の再確認が行われました。また、慶讃法要を盛り上げるためのポスターやチラシの原案も取りあげられました。設営についてもイメージ図を現場で照らし合わせながら詳細について話し合いました。



## あさんががくかい よしゅうがくそ 阿讃雅楽会 豫洲楽所



記念連載企画

**雅楽**の日本伝来以降、仏教儀式において雅楽が演奏されたという記録が残されています。

古くは奈良の「東大寺」で、大仏開眼供養会（開眼法要）において林邑楽※りんゆうがく（ベトナムの僧侶が伝えたといわれる音楽）の楽曲が奏されたと記録されています。

**本願寺**においては、第21代明如上人が舞楽声明を嗜まれ、幕末から明治に移行する時代、京都から東京への遷都に伴い衰退の危機にあった四天王寺楽団の救済に尽力され、また1911年（明治44）親鸞聖人650回大遠忌法要には舞楽四箇法要※ぶがくしかほうようを導入されました。以降、現代においても本山の法要では総勢100～150名の楽人が合奏し、お勤めをお荘厳しています。

**来年** 5月12日に勤修されます「親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年 四州教区・本願寺塩屋別院慶讃法要」でも、阿讃雅楽会、豫洲楽所の会員僧侶が奏樂します。法要中の雅楽の音色にも注目してみてください。



# 四州教区少年連盟第8回子ども報恩講

11月19日、本願寺塩屋別院本堂で四州教区少年連盟主催の第8回子ども報恩講を開催しました。法要『らいはいのうた』をお勤めした後に、加藤大地師（今治組常高寺住職）による、バルーンアートショーと作成体験を行いました。

子ども報恩講では、初めに、子ども達が仏さまに献灯、献花、献香を行い、厳かな雰囲気の中で法要がお勤まりになりました。

また一転して、バルーンアートショーでは、講師がバルーンで作られた獅子の頭をかぶり音楽と共に颯爽と登場。その後も



軽快な音楽と共に様々な作品を矢継ぎ早に作り出し、バルーンで作られた孔雀や龍が本堂を駆け巡りました。子ども達も大いに喜び、また、大人も一緒にバルーンの迫力に驚き、楽しんでおりました。引き続き、作成



体験では、バルーンアートで使う風船や道具について説明が行われた後、花などを作成しました。時には苦戦する所もありましたが、皆で助け合いながら作品を作りあげました。最後に、参拝記念のお菓子と、仏さまのお供えを皆で分け合って子ども報恩講は終了しました。今回の子ども報恩講は、組重点プロジェクトリーダー・サプリーダー研修会を兼ねており、また、実践運動四州教区委員会組織育成部にもご協力いただきました。この日の本堂は、皆の多くの笑い声に包まれた一日となりました。

# 本願寺塩屋別院

## 清掃奉仕

(おみがき)

11月4日、本願寺塩屋別院にて清掃奉仕が行われ、仏具のおみがきを行いました。別院の門信徒だけではなく、実践運動四州教区委員会組織育成部をはじめ、教区内の多くの方にご参加いただきました。沢山のひとと一緒に、おみがきは、参加者同士の話も盛り上がり、和やかな清掃奉仕となりました。





## お聴聞を大切に

—中・四国ブロック講社講員研修会—



10月26日から27日、中・四国ブロック講社講員研修会が桜花の郷 ラフォーレ庄原(広島県)にて開催されました。初日は開会式、勤行の後、北山祐章師(本願寺派布教使・備後教区沼隈南組光源寺住職)に法話をいただきました。2日目は朝の勤行「正信偈」をお勤めした後、前日に引き続き北山祐章師の法話、尾井貴童師(本願寺執行)による「相続と復興」をテーマとした研修が行われました。

### 講社とは

講社とは、寺院組織とは別の生き立ちを持つ、浄土真宗の聞法を支える講(講社)組織です。

講社の歴史は古く、平安時代には既に、月の決められた日に講員が集合し、聞法の寄り合いを行っておりました。浄土真宗でも宗祖親鸞聖人の在世から護持団体と

しての講社の萌芽が見られ、蓮如上人期には本格的な講社が現れるようになりました。また、江戸時代には各地に多くの講社が誕生し、その数は数千を超えるに至りました。先人が守り伝えてきたこの組織は現代に引き継がれ、今も様々な方が講社に参画し本願寺を支えております。

## 「いじめとハラスメント」

—人権啓発推進僧侶研修会—

11月27日、実践運動四州教区委員会社会部主催の人権啓発推進僧侶研修会が本願寺塩屋別院にて開催されました。講師はビハーラ活動、思春期支援、性感染症支援など幅広い活動をされている古川潤哉師(佐賀教区松浦組浄誓寺)を招き、「いじめとハラスメント」をテーマに講義をいただきました。

講師は子どもの不登校やいじめの問題を取りあげ、文部科学省のデータと共にその実態を示されました。続いて、ハラスメントについての話をされる中で、LGBTQsはその様な経験を受けた割合が高い傾向にあり、セクシュアリティの問題もかかっていると示されました。講師は、自身にとって異質なものを排除するのか、或いは我慢しつつも認めるのかというのは難しい問題である。しかし、皆と違うからという理由で扱いを変え

るのは良くないことであり、多くの人がいじめとハラスメントの問題や課題を理解した上で、人権侵害を容認してはいけないという態度を示すことが理想であると締めくくられました。





## 仏教・真宗の基礎を学ぶ

### —各県連研開催に向けた研修会—

先般、教区内連研開催に向けた取り組みの一環として「連研開催に向けた研修会（いまさらきけない仏教講座）」を实践運動四州教区委員会伝道研修部主催で開催しました。

標記研修会は、8月から10月にかけて四国4県でそれぞれ行ないました。内容については教学関係と勤式作法の二本立てとなっており、参加者は始めに「お釈迦様の生涯について」を学んだ後、「合掌礼拝・焼香作法、仏壇の荘厳等について」の講義を受けました。

「お釈迦様の生涯について」では、仏とは悟った者、真実に目覚めた者を指し示し、この様な仏が説いた教えが仏教であると前置きした後、お釈迦様の生涯を誕生から入滅に至るまで段階を追って学びました。また、お釈迦様に関するキーワードをコラムとして紹介しており、お釈迦様が生まれた際の伝説、四苦や三宝、自灯明法灯明について解説がありました。



「合掌礼拝・焼香作法、仏壇の荘厳等について」では、日常で使われる「正信偈」と正しい合掌礼拝の作法を学んだ後、他宗派の仏事と混在しがちな焼香作法や仏壇のお飾りを、浄土真宗の法式に乗り取り、改めて再確認しました。

「合掌礼拝・焼香作法、仏壇の荘厳等について」では、日常で使われる「正信偈」と正しい合掌礼拝の作法を学んだ後、他宗派の仏事と混在しがちな焼香作法や仏壇のお飾りを、浄土真宗の法式に乗り取り、改めて再確認しました。

### —新旧教務所長・輪番歓送迎会—

11月21日、ホテルアネシス瀬戸大橋（香川県）にて、9月1日付人事異動に伴う羽川俊裕前教務所長・輪番並びに岡田義宣新教務所長・輪番の歓送迎会を開催しました。

歓送迎会では、開会に先立ち、発起人代表として筑後誠隆教区会議長にご挨拶いただき、引き続き、羽川俊裕前教務所長・輪番、岡田義宣教務所長・輪番の挨拶、そして、羽川俊裕前教務所長・輪番への記念品贈呈が行われました。また、乾杯の発声は藤山憲二宗会議員、閉会では西村敏夫宗会議員に挨拶をいただきました。多くの教区内各地の僧侶、

別院の門徒がこの会に出席し、交流を深めました。





# 備後名物！ウォークラリー体験

―中・四国ブロック少年連盟指導者研修会(備後教区担当)―

10月30日から31日にかけて、広島県の浄泉寺・本願寺備後教堂を会場に、中・四国ブロック少年連盟指導者研修会が開催されました。四州教区からは少年連盟単位の方々を中心に4名が参加しました。

1日目の研修「尾道ウォークラリー」では、会場の浄泉寺を発着とし、特製のブックマップを使った尾道巡りを体験しました。また、ゲームとして楽しめる工夫もされており、教区毎に分かれたチームは、ブックマップ内各要所の設問

に考えを巡らせながら、楽しく散策しました。会場周辺は、古くからお寺や神社が密集している地域であり、大きな寺社仏閣やロープウェイ、しまなみ海道を一望できる展望台など、多くの観光名所に立ち寄ることもできました。そして、研修会終了後、懇親会が催され各教区の近況等を共有しました。

会場を本願寺備後教堂に移した2日目は、朝のお勤めから始まり、続いて研修「哲学カフェ」が催されました。「哲学カフェ」は少人数の

班に分かれ、特定のテーマに対し話し合う研修でした。ただし、「毎の発表は行わない」「発言せずただ聞くだけでもよい」「反論は積極的に言う」といった独自のルールが設けられ、様々な立場の人が話し合いに気兼ねなく参加できるよう創意工夫が凝らされていました。最後に、閉会式で次回研修会の担当教区である四州教区を代表し、香川公潤四州教区少年連盟委員長が挨拶を行いました。



## 「キッズサンガ高知」のお便り

「キッズサンガ高知」では、11月3日に子ども16名と大人13名が集まり、高知市工石山青少年の家(高知県)でうどん作り体験を行いました。体験後は、大人も子どもも自分で作ったうどんをおいしくいただきました。

またお昼からは、施設内の体育館を借りて子どもたちとレクリエーションをして遊びました。

高知組善教寺 寺村史裕







## 布教団による リレー法話

第10回

# 「阿弥陀という はたらき」

本願寺派布教使  
林 惠真

(四州教区布教団員  
飯山北組西招寺住職)



内臓脂肪を取るからナイシ

そうです。

ツール、お腹のガスだまりをピ  
タツと止めるからガスピタン  
など、小林製薬の製品をみる  
と、効能をズバリと言い当てた  
ネーミングが光ります。一方、  
キャベジンという胃腸薬があ  
ります。これは、キャベジンと  
いう成分がキャベツから発見  
されたことから、そう呼ばれる

親鸞聖人は阿弥陀様のお名

前の由来について、あらゆる命  
を撰め取って捨てない仏様だ  
から、阿弥陀と申し上げるので  
すよと、お示しになりました  
〔浄土和讃〕。これは、先ほど  
の薬でいえば、小林製薬の製品  
名が効能を表す形になってい  
るのに重なるのではないで

しょうか。もつとも、阿弥陀と  
いう名の原意は、量り知れない  
光と寿の仏様です。そのお徳を  
表す名という意味からすれば、  
キャベジンのように成分が薬  
名の由来となっているのに近  
いかもしれません。ただし、  
キャベツの成分が胃に作用す  
るとはいえ、キャベツは胃腸を  
調えるために生育していると  
は言えません。対して、阿弥陀

は、ナイシツールのような薬を  
飲む以外にも方法はあります。  
食事制限であったり運動で  
あったり。対して、この私を撰  
め取って捨てないはたらきは、  
無量の光と寿を具えた阿弥陀  
という仏様以外にはなし得な  
いと、聖人は讃えられたのであ  
りましょう。

様の場合は、光明無量と寿命無  
量のそのままが、あらゆる命を  
撰め取るために具えられたお  
徳にほかならない。だからこ  
そ、その本来お徳を表す阿弥陀  
の名を、はたらきを表す名とし  
てお示しくださったのではな  
いでしょうか。

この人生に寄り添ってくださ  
り、共に歩んでくださる、それ  
が撰め取って捨てないという  
ことです。だからこそ、私自身  
もこの苦悩の人生を、お念仏の  
人生として受け入れていくこ  
とができる、それが阿弥陀とい  
う名のはたらきです。

また、内臓脂肪を減らすに



「涅槃に入る」

本願寺派司教

能仁 正顕

(龍谷大学文学部教授  
徳島南組道浄寺住職)



【涅槃に入る】  
釈尊絵伝(花巻市博物館)より  
沙羅双樹の下、涅槃に入った  
仏陀を悲しむ神々や比丘たち。  
香や華などの供物を持参する  
マツラ族の人たちや、悲しみの  
あまり卒倒する獅子や神も描  
かれている。

お釈迦さまは、鹿野苑でかつての5人の苦行仲間、45年間、世の名声と尊敬を一身に享受しますが、いよいよ人生の終焉を迎えることとなります。

「諸行(作られたもの)は滅する」という性質のもつて修行を完成させな

その言葉に呼応して、「ああ、諸行は無常なり。生・滅という性質をもつ。実に生じては滅する。それら(諸行)の寂靜は安樂である」と、帝釈天はお釈迦さまの涅槃を讃えます。日本では、この帝釈天の言葉は「い

ろは歌」として語り継がれます。

我が世誰ぞ常ならむ  
有為の奥山 今日超えて  
浅き夢見じ 酔ひもせず

地獄をはじめ人・天などの輪廻の境涯は、善くも悪くも、欲から生まれ苦楽の世界とされます。涅槃は解脱とも言い、そうした迷いの生死輪廻から解放されることを意味し、インドの宗教家たちが求めた究極の真実でした。

生まれたる者は必ず死ぬ。80才、お釈迦さまはついに煩惱と業(カルマ)を断ち切り、生死輪廻の世界に再生することのない、絶対の安らぎの境地に入ったのです。この聖者の死を凡人の死と区別して「完全な涅槃(般涅槃)」と呼びました。仏陀なので「大いなる」と形容されました。お釈迦さまの遺教に

「自らを灯明とし、法を灯明とせよ」という言葉があります。ではどのように修行し涅槃を完成させたのでしょうか。

修行の肝要は、戒律を守り、瞑想し、智慧を育む、この3つの学びを基本とし、煩惱と業の束縛から自らの心身を解き放つことでした。

煩惱をかかえて日々を過ごす「私」は、決して頼りになるとは言えません。無知や欲のために、縁に触れば何をしてもかすか知れないからです。しかし、頼りにならなくても、何かが実感できる存在は私自身を置いて外に無いことも確かです。自ら為すべきことを為して傲り高ぶらず、倦むことなく教えを実践する私自身が教えを享受する喜びを実感していく。ここに目指すべき涅槃の境地があることを教えています。

(終)



# 寺報のすゝめ (作成者インタビュー)

香川東組徳勝寺  
筑後誠邦住職(左)  
筑後誠隆前任住職(右)

寺院住所:  
香川県さぬき市寒川町  
石田東甲618-1  
Webサイト:  
<http://www.Daigo.or.jp/>



寺報作成のみならず、WebサイトホームページやFacebook、  
YouTubeも精力的に発信中。  
また、季刊誌寺報『慈光』は徳勝寺Webサイトホームページ  
でも閲覧できます。

**A 2.**  
お参りへ行ったときに寺報の  
話題が出ると、作ったか  
いがあったなと感じます。  
今一番人気の記事は「若坊守のお  
じやったもんせ」です。門徒さん  
は基本にお寺に新しく入  
ってくる人に興味深々です。  
皆さんにその人がどういった  
人物なのかを伝えるためにも  
寺報は一役買っているのだし  
ょう。

**Q 3.**  
記事を作るうえで心掛けてい  
ることはありますか？

**A 3.**  
お寺に興味を持ってもらえる  
様に、少しでも手に取って見  
てもらえる様に、カラフルに  
して写真も増やしています。  
また、門徒さんの立場に立っ  
て、法要等でお寺へ参る際、  
不安を減らせるような内容も  
組み込むようにしています。

- オススメの寺報づくり素材
- ・高画質フリー素材等
  - Pixabay
  - ・シルエットやアイコン等多彩な素材を無料配布
  - TopeconHeroses
  - ・人物等かわいい無料イラストいらすとや
- ※上記は商標利用以外で使用できる無料配布物です。

徳勝寺 筑後誠邦住職・誠隆前任住職  
『季刊誌寺報『慈光』』  
お寺の機関紙誌である寺報。多くの  
お寺がそれぞれ創意工夫を凝らして編  
集、発刊しております。一方で、「ど  
のように作れば良いのか」「何を書け  
ば良いのか」「他のお寺ではどうして  
いるのか」と悩むこともあろうかと思  
います。  
この度はその様な思いも踏まえ、寺  
報を積極的に発信している香川東組徳  
勝寺の筑後誠邦住職と誠隆前任住職にお  
話を伺いました。



**Q 1.**  
寺報(慈光)の最初の発刊は  
いつですか？  
また、そのきっかけは？

**A 1.**  
戦前から法要案内をはがき  
で行ってきましたが、寺報  
として案内以外の記事を書  
き始めたのは父の代(誠隆  
前任住職)になってからです。  
時代の変化に合わせて、少  
しでも仏教に興味を持って  
もらえばよいなと思って始  
めました。

**Q 2.**  
寺報を発刊し続けるのは大  
変ですが、続けてよかったです  
とを感じるエピソードはあり  
ますか？

- Q 4.** 寺報作成にはどのようなアプリケーションを使っていますか？
- A 4.** 「Adobe InDesign」です。以前は「Photoshop」や「Illustrator」、  
「Word」などでも作ったことはありましたが、結局慣れれば雑誌編集  
向けの「Adobe InDesign」に落ち着きました。
- Q 5.** 筑後さんにとっての寺報とは何ですか？
- A 5.** 寺報はとにかく、お寺に人々が参ってもらえるようなきっかけを作るの  
が第一の目的です。そのうえで、お寺の人自身が、仏教やお寺の活動を  
楽しんでいるという姿勢を記事に乗せて伝えていくことで、皆さんにも  
仏教やお寺は楽しい所なんだと感じてもらえたらと思います。